



武器に見られる吉祥文様——梨地蕪蒔絵螺鈿鞍——

古来より人々は、様々な事物、象をめでたい兆し、良いしるしと捉え、福を呼び込むためにそれらを意匠化し、様々なものに表してきました。

武器・武器に用いられる吉祥の意匠としては、龍や蜻蛉などがよく知られます。龍は神としても崇められる強大な力を持つ伝説上の存在です。蜻蛉は後ろに退かず前方に飛び続け、素早い動きで獲物を捕らえることから勝虫と呼ばれました。武士たちは、武運長久の願いを込めて、その力や性質が戦いにふさわしいとされる神獣や動物などを意匠に取り入れたのです。

一方で、武器・武器に表される意匠の中には、戦いには一見そぐわない装飾も見られます。写真は、蕪が表された井伊家伝来の鞍です。全体を金梨地とし、蕪の根を銀打出、葉を金高蒔絵と螺鈿で両輪の形に添うように表しています。葉の装飾は両輪の内側にまで及んでいます。

古来より、蕪は様々な意味合いを



梨地蕪蒔絵螺鈿鞍 (当館蔵)

持つて表されました。丸みのある形がふくよかさを想起させる点、読みが「株」（財産のこと）に通じる点などに吉祥性が見出されてきたとされます。また、その読みが「頭」にも通じることから、組織の頭になるという立身出世の願いが込められた縁起物ともされます。後者の意味から、蕪は、武家にとってふさわしい意匠とされたようです。

この鞍は、もとは、八代将軍徳川吉宗（一六八四〜一七五二）の所用と伝われます。居木の裏には「享保四年（一七二〇）六月吉日」、「政長（花押）の銘が切られています。政長は、正徳から享保（一七一〜一七三六）ごろに活躍した幕府御用鞍師の辻政長と考えられます。



正面部分

井伊家が拝領したのは、安政五年（一八五八）で、十三代直弼（一八一五〜一八六〇）が十四代将軍徳川家茂から拝領したものと考えられます。直弼自身もこの拝領品には思い入れがあったのか、鞍の形態や意匠、用いられている素材、技法がわかるよう絵図に写し取らせています。

この鞍は、江戸時代の高い工芸技術を楽しむことができる美術品としてだけでなく、幕末の将軍家と井伊家の関係の深さをうかがえる歴史資料としても重要な作品です。

【彦根城博物館学芸員 今中啓太】

写真の作品は、テーマ展「吉祥——招福の意匠——」で1月1日（水・祝）〜2月2日（日）の期間、展示します（期間中無休）。